
ポケットモンスター「トランス」 ～ S 団の陰謀～

ヨシタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター「トランス」 ～S団の陰謀～

【Nコード】

N8371M

【作者名】

ヨシタカ

【あらすじ】

僕が前、何も考えずに書いていた、下手な小説をリメイクした小説です。

人間界からポケモンの世界にやってきた「ユウタ」と「ルミ」そんな二人は冒険の旅にでる。だが、裏ではS団^{シャトル}という、人やポケモンを平気で殺す、とんでもない組織が関わっていた。全地方をまたにかけてポケットモンスター最終章が今始まる。

プロローグ（前書き）

プロローグは、短いです。

プロローグ

ここは、

「カントー地方 マサラタウン」

ある少年は、白いベッドで寝ていた。その少年の名前は、「ユウタ」

ユウタは、ゆっくり起き上がり、あくびをしながらこう言った。

「あれ？　なんで僕は、こんなところにいるんだ。確か僕は、友達と遊んでいて、崖から落ちて……」

そう思い出した時、頭がずきずきしてきた。　どうやら、崖から落ちた時の傷みたいだ。

でも、普通なら死んでいるはずだ。

もしかしてここは、天国？　（まあ白いベッドがあるんだから地獄ではあるまい。）

でも天国って白いベッドってあるのかな？　ユウタが考えていると、扉が開いて女の人が入ってきた。

「あ、気がついたんだ。私は、マキ。あなたは」

「僕は、ユウタ」

「あなたが崖から落ちそうだったから、チルちゃんて助けたのよ」

「チルちゃんって何ですか？」

「あつチルちゃんってのは、私のチルタリスのことなの」

ユウタは、耳を疑った。チルタリスってまさか。

「えっあのポケモンの」

「私、ポケットモンスター以外のチルタリスって聞いたこと無いんだけど」

「ポ、ポケットモンスターだって〜!？」

そして、今僕は自覚した。今、自分はポケットモンスターの世界に居るのだと……

第一部 第一章 世界が変わった日！

ポケモンってあの大人気ゲームのポケモン？ 僕も大好きでやっていたあれなのか？

ユウタが混乱していると、マキが話しかけてきた。

「あなたもしかして、別の世界から来たの？」

「ええっ何でそれを！」

「あなたの他にも、二人同じような人が居たのよ。もっともそのうち一人は、5年前だけだね」

「もう一人の方は？」

「下に居るわよ」

「ええっ居たんですか」

「ええ居たわよ。あなたと同じ日に落ちてきたの。それより、あなたが居た世界のこと教えてほしいんだけど」

「分かりました」

それから、ユウタは、自分が居た世界について、説明し始めた。

「へえーそうなの。でもポケモンのゲームの内容がちょっと違うけど」

「どんなところが違うんですか？」

「それは、小説が進むにつれ分かるんじゃない？でもチャンピオンリーグのことは説明するわ。」

チャンピオンリーグというのは全てのポケモンリーグを突破した人だけがチャレンジできる、最強のリーグなの。

チャンピオンリーグは普通と同じで、チャンピオンと四天王四人で構成されていて、さっき言った5年前に来た人が、チャンピオンなのよ」

「すごいですね。来たばかりなのに、そんな事をするなんて……」

「まったくね。じゃあ、ルミを呼んでくるね」

「ルミって？」

「下に居る子よ」

そう言つと、マキは下に下りていった。

数分後……

「連れてきたわよ」

「どうもルミです。よろしくねユウタ！」

その黒く美しく吸い込まれそうな瞳にユウタはしばし見惚れていた。

「さて二人とも、オーキド研究所に行きましょう。何か分かるかもしれないから」

（無視かよ）

「そうしましょう。ユウタ、マキさん」

このルミの笑顔を見た時の不思議な気持ち……
一目惚れかなあ……
でも、この子を見たときから心にはある強い思い芽生えていた。

「（いま会ったばかりだけど、初めてこんな気持ちにさせてくれたこの子を守る！）」

オーキド研究所

「こんにちはー博士」

「その声は、マキくんかね」

パソコンで仕事をしていたオーキドがキーボードを触っていた手を止め、こちらを振り返った。

「最近パソコン何でもできるから便利じゃなー。おや、君のそばに居るのは誰じゃ」

「この二人は、ヨシタカさんと同じで人間界から来たらしいの。だから相談しに来ました」

「何！？ ヨシタカくんと同じような子だって」

「僕ユウタです」

「私ルミです」

「くわしく話を聞かせてくれ」

二人は落ちた時の状況を話した。

「他に何か思い当たることは無いか」

二人は考え、思いついたようだった。そして同時に

「そういえば、崖から落ちるとき、龍の姿をした10mぐらいの高さのポケモンを見ました！」

「私事です」

「それは、聞いた事の無いポケモンじゃな」

「ねえ貴方達、相談が有るんだけど」

「何ですか？ マキさん」

「旅に出てみない？」

「ええっ！？ どうゆうことですか？」

「それは、聞いた事の無いポケモンだけど、各地のジムリーダーやポケモンリーグの人達なら分かるかも知れない。

だから、ジムバッジを集めながら情報を聞く旅をしないかって事よ」

「僕は、賛成です。あのポケモンの事知りたいですから」

「私もです」

「でも、1年間このマサラタウンでポケモンバトルの特訓をしてからね。

実際のバトルを経験せずに旅に出すのは危ないからね」

そうして、1年後の旅が決まり、家に帰った。

マキの家

マキは、モンスターボールを2個出した。

「このポケモンのどっちかを、選びなさい。それがパートナーになるわ」

僕達の前には二つモンスターボールの中に入ってるのはミニリュウとタツベイだ。

そして僕はミニリュウ ルミはタツベイのボールに自然に手を伸ばしていた。

「パートナーは決まったね。ちなみに、さっき話した、チャンピオンリーグのチャンピオンが、選んだポケモンなのよ」

「名前聞いても良いですか？」

「ハヨシタカ」さんよ。

あとこれ、ポケギアあげるわ

私と博士の番号が入ってるから、いつでも電話してね」

僕は、ポケギアよりヨシタカさんのことを考えていた。

「（僕達より5年も早くこの世界に来てチャンピオンになった人があ。

会ってみたいな）」

こうして僕達が初めてこの世界に来た日は終わった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一部 第一章 世界が変わった日！（後書き）

次回から、1年後の話になります。

第二章 S団の惨劇！

マサラタウン 湖

「（あのパートナーを決めた日から1年後は明日だ。明日には僕たちは旅に出る。

1年間、たくさん努力をした。毎日、何時間も特訓をした。だから、並みのトレーナーには負けなくらい、強くなった。ミニリユウやタツベイは、カイリユウとボーマンダに進化した。

「この世界には、オリジナル技というのがある。略して【オリワザ】と呼ばれる。

オリワザは、普通ポケモンが考えないような事を、人間が教えて作る技であり、

ポケモンとの信頼も必要だし、相当、訓練をしなければ出来ない。」

そのオリワザも使えるようになった。

ルミを守るだけの強い力を得た。

これからの旅で危険な事が有っても、絶対にこの子を守る。」

ユウタは、決意を湖に伝えた。だがユウタの後ろには怪しい人影が居た。

「行け、ウィンディ。かえんほうしゃ」

後ろからの、不意打ちにユウタは振り返り、

「カイリ（ニックネーム）、しんそく！」

しんそくを使い、かえんほうしゃを消した。

「誰だ！」

そこには、全身黒ずくめの格好で、服には大きく青色で【S】と書いてある人が居た。

「ちっ、襲って金だけ奪い取ろうと思っていたのに！」

「言わないなら、無理やり吐かせるぞ。カイリユー、げきりん！」

「ウインディ、しんそく！」

両者まったく引かずに、互角。

だが、相手が勝負に出た。

「ウインディ、こうそくいどうからの、フレアドライブ！」

こうそくいどうで、動きが追いつけなくなり、背後からフレアドライブをくらった。

「リ्यूリ्यू」

「なかなかやるな。じゃあこれをくらえ。
オリワザ、流星パンチ」

「何！？オリワザだと！」

カイリ्यूは、普通にりゅうせいぐんをした。

「何かと思えばただの、りゅうせいぐんじゃないか！」

「違うさ。ここからが！」

カイリ्यूは飛び上がり、拳を突き出した。

すると、りゅうせいぐんが、手に吸い込まれていく。
そして、そのまま降下し、ウインディにパンチをした。

「りゅうせいぐんの力を、拳に集め、パンチをする。
これが、オリワザ、流星パンチさ」

ウインディはダメージを受ける。しかし……

「それなら、こっちだって、
オリワザ、プロミネンス・スピアー」

「なっ！？お前も使えるのか！」

「へっ、くらえー」

ウインディの毛が逆立ち、1本、1本に熱い炎が入って

そして尖り、燃えた鋭い毛が、こっちに向かって飛んでくる。

「オリワザ、プロミネンス・スピアーは、ウィンディの毛を鋭く尖らせ、燃やし、それを広範囲に飛ばすワザだ。避ける事はほぼ出来ない、高威力の技だ」

カイリユーは、まともに技を受け、ダメージを負っていた。

「くそ！どうすれば……」

「まだまだ行くぜえ。」

オリワザ、プロミネンス・スピアー」

2回目だった。

「（そうだ。避けられないなら、壊せばいいんだ。毛だから弱いはず）カイリ、広範囲を焼き尽くせ。はかいこうせん！！！！！！」

すると、プロミネンス・スピアーは崩れていった。

「何っ！ プロミネンス・スピアーが破られただど！」

「このまま行くぞ。」

オリワザ、流星パンチ！」

「リユー、リユーリユーリユー！」

ウィンディは倒れた。

「くそっ負けちまった!」

「じゃあ、もう一度聞く。誰だ!」

「ちっ、しゃあねえなあ。俺が入ってるのはS団と言う、組織だ」

「何っ、S団だと!」

S団とは、他の団が1つや2つの地方を侵略するのに対し、全ての地方に手を出す組織で、

平気で人や、ポケモンを殺す、極悪集団だ。

「と、言っても俺達下っ端は、基本的に金儲けしかないけどな」

基本的な目的が金儲けであるならつまりそれは、その金を使って何かをするということに繋がる。

「じゃあ、その金で何をしようとしているんだ?

おまえ達の最終目的とは何だ!」

「おまえ、それを聞くのか?」

「ああ」

「聞いたのがばれたら、確実に殺されるぞ。それでも良いのか」

「なんと言おうと、聞くぞ！」

「じゃあ教えてやる。俺たちの最終目的、それは――」

男は、その先を喋らなかった。いや、喋れなかった。

体が4つに切り裂かれていたから……

首から上だけが、ユウタの足元に転がってくる。

「あああああああああ！」

ユウタは、悲鳴をあげた。

男は、ボーマンダのドラゴンクローによって、もう帰らぬ人となっていた。

そのボーマンダは、自分が知っている優しいボーマンダでは無く、禍々しいオーラを放っていた。

ボーマンダに乗っている男が、声を出し始める。

「裏切り者には、死の洗礼をあたえなきゃな。こいつも、一応殺つとくか

ボーマンダ、ドラゴンクロー！」

ボーマンダがユウタに襲い掛かる。でも、そこに一人の女性が現れた。

「ボスが、お呼びよ。帰りましょう」

その女性は宙に浮いていた。

「お前、なんで浮いてるんだ？」

「ゲンガーのサイコネシスよ。じゃあ行くわよ！」

ユウタは、勇気を出し声を出した。

「お前達は誰だ！」

「俺は7人^{セブン カタストロフ}の破壊者の1人、
破壊の侵略者——ウラヌスだ！」

「私も7人^{セブン カタストロフ}の破壊者の1人、
邪霊の心眼——黒葉^{コクハ}よ」

2人はそれだけ、言うつと、去っていった。

ユウタは、7人^{セブン カタストロフ}の破壊者の事を思い出す。

「（たしか、7人^{セブン カタストロフ}の破壊者ってS団の幹部達の事だよな）」

ユウタは、そう思いながら、自分の無力さを思い知る。

数時間後

やっと、落ち着いたユウタは、ポケギアで、マキとオーキドを呼び出し、有った事を告げ、後を任せた。

そして、ある決心をして、ルミのところへ行く。

マキの家

「ルミ！」

「ユウタお帰り！」

やっとユウタが帰ってきて、嬉しそうなルミにユウタは、残酷な事を告げる。

「ルミ！ 君を旅に連れて行く事は出来ない！」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二章 S団の惨劇！（後書き）

次回、旅立ちです。

第三章 VSライバル！

「ルミ！ 君を旅に連れて行く事は出来ない！」

「どうゆう事！」

「危険だから、僕一人で行く」

「それじゃ、納得できないよ。この世界に来た日、一緒に行くって約束したじゃん！」

「……分かった。理由を話す」

ユウタは、S団の幹部のことを話した。

「あんな簡単に人を殺すような組織が居るから、君が旅に出るのは危険だ！」

パアアアン！ユウタが言い終わった後、ルミが平手でユウタを殴った。

「元の世界に戻りたいのはユウタだけじゃないんだよ！

しかも、ユウタが少し強いだけで、私達の強さはほとんど同じだよ！

私が駄目ならユウタも駄目だよ！」

そして優しい声で、ルミが語りかける。

「私は、どんな危険な状況でも、ユウタが守ってくれるって信じて

るよ！」

「（さつき、決めただけじゃないか。

「これからの旅で危険な事が有っても、絶対にこの子を守る」
僕は、自分で守るんじゃなく、ルミを縛りつけよう……）」

ルミ！ ごめん。すっかり自分を見失ってた。

一緒に行こう。どんな事があっても、君を守るから！」

ルミは、笑顔で答えた。

「うん！」

翌日

僕は、持ち物を確認した後、家を出る。

「オーキド博士、マキさん今までありがとうございました」

「ああ、頑張るのじゃぞ！ ポケモン図鑑もよろしくな」

僕たちはポケモン図鑑を買っている。僕が水色で、ルミがピンクだ。

ちなみにマキさんは紫で、ヨシタカさんは青だそうだ。

「元気で頑張つてね。困った事があつたら、いつでも電話するのよ！」

「はい、頑張ります！」

「じゃあルミ！ 行こう！」

「行つてきます！」

1 番道路

そこには、1人の少年と、1人の少女が居た。

「ユウタとルミも今出たところか！」

この元気な子は、ハシンだ。

「おはようございます」

この綺麗な子はハチホだ。

2人は、一緒にマキさんの所で修行した仲間で、簡単に言うと、ライバルだ。

「と、言う事で、ライバルが同時に旅に出たお祝いにバトルしようぜ！」

「ちょっと！ いきなり何言ってるのシン！」

この2人、性格がおかしい。

シンは、バトルばかりしてくるし、チホは……バトルすれば分かるだろう。

結局、押し切られる形で、バトルする事になった。

「行けっカイリ！」

「リユーリユー」

「行くよ！サラ！」

「ボオオオオオオ」

「行っけ〜リア！」

「ガアアップ」

「殺せ！ フラン！」

「フラアアア！」

カイリは、ユウタのカイリユーのニックネーム。

サラは、ルミのボーマンダのニックネーム。（サラマンダーから名前を付けました）

リアは、シンのガブリアスのニックネーム。

フランは、チホのフライゴンのニックネーム。

で、チホのおかしい事は、バトルのときに性格が変わり、凶暴になる事だ。

「カイリ！ りゅうのまいからの、ドラゴンダイブ！」

「リユー！」

「サラ！ こわいかおからの、すてみタックル！」

「ボオオ！」

「リア！ つるぎのまいからの、ドラゴンクロー！」

「ガブ！」

「砕け散れ！ フラン！ 嫌な音からのギガインパクト！」

「フッラー！」

カイリは、攻撃とすばやさを上げて、リアは、攻撃を2段階上げて、

サラとフランは、お互いが、お互いを打ち消しあい、意味は無か

った。

そして、威力の高くなったリアのドラゴンクローをカイリが受け止め、ダメージを受けたが、

上げたすばやさを生かし、すぐ、ドラゴンドライブでの、反撃に成功した。

サラとフランは、お互いに強力な技を出し、まったくの互角だった。

「行くよ。」

オリワザ、流星パンチ」

流星パンチの標的は、リアだ。

「こっちも行くぞ！

オリワザ、ドラゴン・マッド・カッター」

リアはドラゴンタイプとじめんタイプ、両方の力を体に込め、思い切り飛び上がった。

そして、ヒレの部分をカッターのように尖らせて切りかかる！

つまり、ドラゴンとじめんの力を込め、尖った、ヒレで切りかかる技だ。

「じゃあ、私も行くよ！

オリワザ、ドラゴニック・ウェーブ」

サラは、体の力を口に集め、それを波状にして放出する。

龍の力の津波がフランに襲い掛かる。

「消しちまえよ！ヒヤッハッハー！
オリワザ、ドラグ・ハリケーン」

フランは、自分の前に巨大な竜巻を作り、それを飛ばした。
膨大な量の砂を巻き上げ、龍の力を大量に含んだ竜巻がサラに襲い掛かる。

4匹が、強力なオリワザを使い、中心でそれが激突した。

技が終わり、
そこに立っていたのは……

カイリとサラだった。

「やったー。勝った!」

「やったね、ユウタ!」

「くっそーまた、負けちまったか」

「負けちゃったね」 ↑元に戻っている。

「じゃあ、俺達は違う道で行くから、また今度な」

「じゃあ、またね」

「バイバイ!」

「また今度」!

こうして、いきなりのライバル対決は、幕を閉じた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第三章 VSライバル！（後書き）

次回はジム？かな。

第四章 初陣！ジムリーダー！（前書き）

遅くなりました。

第四章 初陣！ジムリーダー！

ジムリーダーが不在のトキワを通り、トキワの森にユウタは来ていた。

「ねえ、何か声が聞こえない？」

「たしかに……」

ルミが言ったとおり、遠くから、ポケモンの鳴き声みたいなのが聞こえている。

「行つて見よう！」

トキワの森・深部

「あつ、ポケモンが2匹居る！」

そこに居たのは、鳴いているメガニウムとルカリオだった。

ルカリオが波動を使い、言葉を伝えてくる。

「私は、強いトレーナーを求めて旅をする、ルカリオのハリオと申します。」

このメガニウムは、ジョウト地方で、出会い、一緒に旅をしている

「ニコ」です。

実は、迷子になってしまったのです。どうか、森を抜ける道を、教えてください」

「もちろんさ！」

トキワの森・出口

「ありがとうございます。そして、お願いがあります」

「何？」

ルミが聞き返す。

「2人で旅するのは、疲れました。モンスターボールの中の、カイリユーとボーマンドは、かなり、強そうです。」

だから、2人とも、私達が求めるトレーナーだと判断しました。なので、旅に連れて行ってください」

ユウタは、S団との戦いの事を思い出しながら、話す。

「僕達は、君達が思っているほど強くない。それでも良いのかい？」

「もちろんです。ニコもそうだろう？」

「メーガー」

「じゃあ、これからよろしくね」

「はい！」

リオは、ユウタの、ニコは、ルミのポケモンになった。
ユウタとルミは、ジム戦の予約をした後、ポケモンセンターで寝た。

翌日

ニビジム

「昨日、予約した、ユウタです」

「俺は、ジムリーダーのタケシだ。正々堂々勝負しよう！」

「行け！ リオ」

「ルツカー」

「行つて！ ニコ」

「メガ」

「行くんだ！ ゴローニヤ、オムスター！」

「ゴツロー！」

「オツム」

「リオ、オムスターにはどうだん！」

「ニコ、ゴローニヤに、マジカルリーフ！」

「ゴローニヤ、まもる！ オムスター、なみのり！」

「ニヤー」

ゴローニヤは、まもるをした。

「ニツコー」

メガニウムの、マジカルリーフは、防がれた。

「オムー」

そしてオムスターは、なみのりだ。

「リッオー」

そこにはどうだんが放たれた。

なみのりで、リオと、ニコは、少し、ダメージを受けたが、はど
うだんは波の中を通り、オムスターに、
大ダメージを与えていた。

「ゴローニャ、まるくなる、オムスター、まもる！」

「メガニウム、オムスターにギガドレイン！」

「リオ、ゴローニャにメタルクロー！」

「ゴローニャー」

「オムオム！」

「メガー」

「リッオー」

今度は、オムスターが守りの体勢になり、ゴローニャは、防御を

高めた。

ギガドレインは、不発になり、メタルクローも大して、ダメージを与えられなかった。

そのまま、3ターンが経過した。オムスターが倒れた。

「ゴローニヤの様子がおかしい！」

ゴローニヤは、攻撃が届かない、バトルフィールドの端で、転がっていた。

「今だ！　ゴローニヤ、ころがる！」

「何ところがるだ！」

「バトルフィールドの端で転がって、威力をアップさせたんだ。ま
るくなるから始まったから、

60 ↓ 120 ↓ 240 ↓ 480だ。」

転がるで、ルカリオと、メガニウムは、倒れた。

「行け、カイリ！」

「リユー！」

「行っけー！サラ！」

「ホウーマー」

「行くだ！イワーク！」

「最後のころがるで散れ！」

「威力960だよ、ユウタ！」

「受け止める！カイリ、ばかぢから！」

ゴローニヤとカイリがぶつかった。

そこに倒れていたのは、ゴローニヤだった。

「くっ、戻れ、ゴローニヤ。行け！カブトプス！」

「サラ、イワークにハイドロポンプ！」

「カイリ、じしん！」

「イワーク！アイアンテールで跳ね返せ！
カブトプス！ぶぶき！」

「ボッオー」

「リユーリユー」

「イワーク！」

「トプスッ」

サラが使った、ハイドロポンプは、アイアンテールで跳ね返され、サラに飛んでいく。

カブトプスの吹雪は、ハイドロポンプを、巨大な氷柱へと変えていた。

氷柱が当たったサラは倒れた。

そして、カイリの使ったじしんは、イワークは耐え、カブトプスは、耐えられず、倒れた。

カイリのころがるのダメージとイワークのじしんのダメージは、ほぼ同じで、互角だった。

「一気に決めるぞ！ イワーク、オリワザ、グランド・ショット」

イワークの周りの砂や、土が、一点に集結された。
そして、それを放出した。

「かなりの圧力がかかっていて、とても威力が高いな。
だが、カイリ、ころがるの時と同じように、ばかぢからで受け止め

る！」

グランド・ショットと、カイリが、激突した。

……カイリは、立っていた。

「行け〜！
オリワザ、流星パンチ」

カイリユーが、流星パンチをし始めた。

「じゃあ、飛んでいる、カイリユーに向かって、
オリワザ、グランド・ショット」

下降し始めているカイリに向かって、グランド・ショットが放たれた。

だが、流星パンチは、それを、貫き、イワークを倒した。

「これがバッジだ。受け取ってくれ」

「ありがとうございます。ところで、龍の姿をした10mぐらいの高さのポケモンって知りませんか？」

「そんなポケモンは見た事が無いな……」

「そうですか。ありがとうございます」

その後、電話番号を交換し、ユウタ達はジムを出た。

「何も分からなかったね」

「まあ、そんなに簡単に分かったら、旅の意味が無いからね。じゃあ、次の街ハナダシティに行こう！」

2人は、おつきみ山に向けて、走っていった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第四章 初陣！ジムリーダー！（後書き）

どうでしたか？

ぜひ感想をおねがいします。

第五章 非情な運命！（前書き）

久しぶりです。

第五章 非情な運命！

おつきみ山を通りハナダシティまでやってきた。

「まずは、ハナダの上にある岬に行ってみようぜ」

「うん」

勝ち抜き勝負に勝ち、岬までやってきた。すると

「今誰か人通らんかったか。通ったんなら、ちょっと家の中まで入ってきてくれんか」

「行ってみる？」

「行ってみよう！」

そこにはコラッタが居た。

「コラッタがしゃべった〜！」

「コラッタちゃんね。今はコラッタでもわいはポケモンマニアのマサキや。」

ポケモン転送マシンに巻き込まれたんや。ワイがああボックスに入

るから
分離ボタンを押してな」

ポチッ

分離成功

「やれやれ助かったわ。御礼に、このイーブイ一匹ずつあげるわ」

「いいんですか」

「もちろん良いにきまつとるやん。助けってくれんかったら、一生コラッタやったんやで」

「ありがとうございます」

二人はポケギアにマサキを登録したあと、ハナダに戻っていった。

ハナダシティ

「ようユウタじゃん」

そこには、シンとチホが居た。

「シンか。どうした？」

「バトルしようぜ」

少々呆れながら言う。

「お前はいつも同じことを言うんだな」

「悪いか」

こうして、シンと下らない事を話していると、バァン！と、銃声が鳴り響いた。

「何だ！」

音のした方を見ると、一人の老人が足を撃たれていた。

「大丈夫ですか？何があつたんですか？」

「ああ、大丈夫じゃ。実は、家に強盗に入られてな。抵抗をしたら、撃たれた。Sのマークがある服を着ていた」

「S団！」

すると、バァン！また遠くで銃声がした。

「行つて見よう」

銃声のした方に行くと、今度は、ポッポが、羽を撃たれていた。

「邪魔なんだよ！」

10メートルほど先に、S団の男を見つけた。

「逃がさないよ！カイリユー、はかいこうせん！」

頭上から声が聞こえた。

「ヨシタカさん！」

ヨシタカさんとは、5年前にこの世界に来て、チャンピオンになった、凄い人だ。

僕が1年間マキさんの所に居た時、にマキさんの家に来ていた。

「ぐおっ！誰だ！人に向かってはかいこうせん、なんか撃つ奴は！」

「この暁 ヨシタカ様さ！人に向かって撃つのは、はかいこうせんと決まっているだろう」

「くっチャンピオンか！だが、勝ってみせる！行け！ポケモン達！」

その男は、大量のポケモンを繰り出した。

基本的に、ポケモントレーナーが持っているポケモンの数は6匹以下。

だが、6匹と決められている訳ではない。

ポケモンとトレーナーの信頼関係が築けるのは6匹までなので、所持数は6匹までが好ましい。

と言われているから、皆、6匹までしか持たない。

だが、悪党には信頼関係など関係ないんだろう。

平気で100匹ほど、それもかなりレベルが高いポケモンが出てくる。

だが、ヨシタカさんなら……

「100匹だろうが、1000匹だろうが関係ない！行くぞカイリユー！」

ちなみに、ヨシタカさんのパートナーポケモンもカイリユーである。

「オリワザ、アルマゲドン！」

カイリユーの手にエネルギーが集まり、それが球体になり、上に上り天空から

たくさんエネルギーの玉が地上にふりそそぐ。

簡単に言えば、流星群の中の岩を取り除いて、パワーを100倍にしたものである。

敵全体に攻撃する技なので、100匹居たポケモンは、全員倒れていた。

本当に凄い人とポケモンだ。

「う、嘘だろ……」

「残念ながら、本当だよ！さあ、奏の場所を吐け！」

ヨシタカさんの態度が一変した。

「どうゆう事だユウタ？奏さんって誰？」

「ヨシタカさんと付き合っていた人だよ。

でも、昔、S団に誘拐されて……それから、ヨシタカさんは、凄くS団を恨んでいるらしい」

「へええ」

ヨシタカさんが、S団の男と話している時、ヨシタカさんの後ろの空間が割れた。

「!？」

「私なら、ここに居るわよ、ヨシタカ」

「奏!？」

そこには、レックウザに乗り、ディアルガとパルキアを使っている誘拐されているはずの奏さんが居た。

「奏!何故？」

「私は誘拐された後、S団の幹部になったの。理由は生きてたら教えてあげるね。レックウザ、りゅうのはどう!」

「ぐう……」

ヨシタカさんは背後から襲われ、傷を負っていた。

「奏、お前はそんな事をするやつじゃ、無かった。どうして、S団の幹部なんかに……」

「あら、生きてたのね。

じゃあ、教えてあげるわ少しだけ。

自らの意思でこうして無いと、洗脳されちゃうの」

「それって……」

「さて、くだらないおしゃべりはこれでおしまい。ディアルガ!ラスターカノン!

パルキア、アクアテール！」

「ヒギアアア！」

ヨシタカさんは、マサラタウン方面に飛ばされていった。

「追っよ！ルミ、シン、チホ！」

『うん！』

「さあ、あんな雑魚置いていて帰えるわよ！」

「はい！奏様」

マサラタウン

「今日もいい天気ね。あら何か降って来る。あれはヨシタカさんとカイリユー！？」

ヨシタカとカイリユーはマサラまで飛ばされて来た。

「行つて。???」

いつもならチルタリスを使うが、空から猛スピードで人とカイリ

ユーが落ちてきたなら話が別だ。

マキが出した、紫色の人型のポケモンは、まずボールの開閉ボタンを押しカイリユーを戻し

その後、人間を抱え地面に着地した。

ヨシタカは目が覚めた。

「マキ、おまえが助けてくれたのか」

「そうです。なぜ、落ちてきたのですか」

ヨシタ力は今までの事を説明した。

「奏さんがS団の幹部！」

バン！

「マキさんヨシタさんは！」

追ってきたユウタ達が、来た。

「大丈夫ですか！」

「ああなんとかな。ユウタ、ルミ。S団は動き出した。それに、何故奏がああなってしまったか、理由が知りたい。お前達の力を借りたい」

「ええ！？僕達弱いですよ」

「そんなこと百も承知だ。だがお前達は強くなる。だから力を借りたい」

「分かりました。まず何をすれば良いんですか」

「そうだな。一週間以内にカントーのトキワ以外のジムリーダーを全員倒せ。話はそれからだ。」

俺のポケギアの番号を教えるから、できたら、電話しろ」

「分かりました」

「頼んだぞ。俺は、絶対にS団に復讐する!」

「じゃあ、今から、ハナダに戻ります」

「頑張れよ!」

「はい!」

t o b e c o n t i n u e d

S団アジト

「ボス!ただいま戻りました」

「ボスは、堅苦しいから辞めると、言っただろう」

「すみません。アメジスト様」

「今日のことは、下から報告が来ている。
良くやった。」

「奏、他の幹部に話すんだ。時は近いとな」

「はっ！」

「計画は順調。後は時間稼ぎをするだけだ……」

第五章 非情な運命！（後書き）

分かりにくい所が有ったら、教えてください。

第六章 死闘！VS破壊の侵略者―ウラヌス（前書き）

遅くなりました。ハナダジム戦は飛ばします。

第六章 死闘！VS破壊の侵略者―ウラヌス

ハナダジムのカスミさんを倒し、僕達はクチバシティに来ていた。カスミさんは強敵だった。

だから、マチスさんに勝つために僕は1週間、トレーニングをしていた。

その途中、僕は、トレーナーから虐待されていたロコンを救出し、ルミはマチスさん対策にサイホーンを捕まえた。今はそれぞれ、キュウコンとドサイドンだ。

「ルミ。そろそろクチバジムに挑もう」

「そうだね。かなり強くなったし」

僕たちがクチバジムに向かっていたときだった。

頭上に巨大な影が通った。

上を向いた。

そこには、少し前に見た、出来れば二度と見たくなかった禍々しいオーラを放っている
ボーマンダが居た。

「久しぶりだなあ。あの、S団員を倒したやつ」

ボーマンダは降りてくる。こいつは、破壊の侵略者―ウラヌス。S団の幹部だ。

旅に行く前に、俺はこいつが人を殺すのを見た。

「ユウタだっ！　ここから、出て行け！」

「おやおや。来ただけでそんな事を言うなんてなあ。

お前は、S団員を倒し、機密情報を聞いた恐れがあるからブラックリストに載ってるんだぞ。

だから、俺が始末しに来たんだ。ボーマンダ！」

「（殺らなきゃ、殺られる）ルカリオっ！」

「貴方が、ユウタから聞いたウラヌスね。私も戦うわ！　ボーマンダ！」

数分後

力の差がありすぎた。

たった数分で、ボーマンダ一体にカイリユ―以外倒された。

「くそっ」

「もう少しは楽しませてくれよな。だが終わりだ。ボーマンダ。ユウタに直接攻撃ハイドロポンプ」
ダイレクトアタック

「カイリユー！」

威力は凄まじかった。

カイリユーが、8割ほど、受け止めたが、残りはユウタに当たった。

「ぐあああああああああ」

「ユウターーーーーー！！！」

ルミは、ユウタが、攻撃されているのを見て、こんな事を思っていた。

「（何で？ユウタが傷ついているのを見ると、胸が痛い。この想いもしかして……）」

「五月蠅いな。先にお前を殺す！げきりん！」

今までは平常を保っていたユウタの心が、どこか壊れた。

「ルミを傷つけるなーーーーー！」

ユウタのルミを守りたいという気持ちは、爆発した。

その時、ユウタに青い光が集まっていった。

ユウタの目は蒼になり、強い意志が宿ったように見えた。

「何だ！ その姿！」

「覚醒とでも言っておこうか」

「ヨシタカさんっ！」

ルミは声を上げた。

そこには、傷が治ったヨシタカが居た。

「覚醒だと」

「聞いたこと無いか？ 究極技アルティメットを使う英雄を」

「ぐっ、だがそれは神話の話。それは信じない」

「だがユウタはお前を倒そうとしているぞ」

「お前だけは、お前だけは許さない。よくもルミを傷つけようとしたな！」

行くぞカイリユー！
アルティメット
究極技！ The・エンド・ザ・ワールドー！

「リユーリユーー！」

ユウタのカイリユウの腕は、漆黒に染まっていた。
そして、その闇の部分に鎌状にし、切りかかった。
まるで、ボーマンダの命が裂けていくように、傷ついていった。

「ふざけるな。俺が負けるわけには。いけーーーーーレジ
ギガス」

「うごごがぎごがぎ」

「ひねり潰せ。
オリワザ、氷岩鋼弾^{ひょうがんこうだん}」

レジギガスは氷岩鋼弾を使った。カイリユーは倒れた。

「そのままユウタの息の根を止めてしまえ」

ユウタは技を受け、倒れた。

「ユウタ――――！！」

ボーマンダは倒れた。

第六章 死闘！VS破壊の侵略者―ウラヌス（後書き）

ユウタ、次回絶体絶命。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8371m/>

ポケットモンスター「トランス」 ～S団の陰謀～

2010年10月31日13時11分発行